江戸日本の街道探訪　第５回

東海道（３）海の舟渡し—「七里の渡し」

* 豪華な朱塗りの巨大な船が熱田（宮）港に入港。圧倒的な迫力である。船を泊め、数人の家来が細長い舟に乗り移り、渡し場に向かっている。渡し場では、大勢の家来が座して殿を迎えている。江戸に向かう大名行列の一行が「七里の渡し」の航海を終えて宮宿、熱田の渡し場に着いて上陸している光景と思われる。家康は東海道に宿駅制度を創設するに当たって、地元の三河、熱田神宮のに宿場を設けた。これが宮宿である。この宮宿から伊勢湾海岸線沿いに航行し、桑名宿に達する船旅が「七里の渡し」である。その距離七里、約２８㎞。東海道の正式海路であり、官道である。
* 七里の渡しは東海道で唯一、海を渡るコースである。家康は、この海の舟渡しを東海道の正式ルートと定めた。この海上ルートは鎌倉、室町時代から使われている歴史のあるルートであること、何よりも陸上を行くより大幅な時間短縮が期待できる。旅の費用も安くてすむ。そこでこの渡しを「七里の渡し」と明示し、両港の整備、舟・船頭など運行に携わる職人の組織造り、宮宿・桑名宿双方の大規模な宿場造りに着手する。やがて、七里の渡しは、「海を行く東海道」の名物となり、関東から来る、お伊勢参りの人々も皆、この七里の渡しを利用することになった。結果、宮宿・桑名宿は、東海道で１，２を争う宿場に発展する。
* ■図1　七里の渡しの航路。陸路は佐屋街道（Wikipedia 七里の渡し）

七里の渡しの航路

* 「七里の渡し」の海路図を見る。東海道は三河の国に入ると岡崎、池鯉鮒宿、鳴海宿を経過し伊勢湾沿いに北上し、宮宿（熱田宿）に到達する。その位置は名古屋城から、南へまっすぐ下がり、熱田神宮に近い伊勢湾口地点。そこから舟に乗り、伊勢湾岸沿いに西へ航海し、伊勢の桑名港に入る。
* 航路は内回りルート（陸地沿い航路）と外回りルート（沖廻り航路）があり、通常、満潮時は内回り、干潮時は外回りを採用する。「七里の渡し」の七里とは、宮宿から桑名宿までの地理的な距離のこと（約２８ｋｍ）で、潮の流れ、気象条件次第で航路の長さと、航海時間は、異なってくる。また伊勢湾の埋め立て工事が進捗しており、海岸線は、江戸の始めと終わりとでは、大分異なっている。航海時間は順調に行って4時間から6時間と云われている。しかし、10時間もかかったという記録もある。

渡し舟の種類

* この航路に使われた舟は、参勤交代の大名が乗る御座船と呼ばれる豪華な舟から、一般庶民が乗る帆掛け船まで各種在った。御座船とは、天皇、公家、将軍、大名などの貴人が乗る豪華な舟のことで、華麗な屋形が組まれている。そしてその屋形の屋根の形式で身分を表したという。天皇は、将軍の舟は檜皮葺きと云う具合に。また江戸時代には、大名は中型軍船、関船を豪華に飾り立てて使ったという。
* ■図2　徳川将軍家の御座船「天地丸」（Wikipedia御座船）

船の料金

* 七里の渡しの船賃は一般庶民が乗る、帆掛け船で旅人一人４５文、荷物一駄１００文、馬一頭口取り足付きで１２３文と決められていた。一文が現代のいくらに相当するかの計算は難しいが一文３０円（大井川島田市観光案内）とすると一人1350円。妥当な値段と云える。

宮宿

* 七里の渡しは旅の名物となり、熱田神宮詣（第二の伊勢神宮と云われるくらい格式が高い）、お伊勢参りの参詣客が宿泊する宮宿と桑名宿は大きく発展する。結果、宮宿の宿泊施設は、本陣2軒、脇本陣１軒，旅籠248軒となる。これは53宿の中で文句なく一位の規模である。ちなみに品川宿の旅籠数は93軒である。
* 宮宿の七里の渡し船着き場と背後に連なる宿場の様子を見るとスケールの大きさに圧倒される。石垣で仕切られた広大な船着き場には、大型帆船が何隻も繋がれており、多数の荷舟、屋形船が行き交い、大型帆船2隻が入港しようとしている。海沿いに巨大な常夜灯が立ち、その後ろに大鳥居(熱田神宮)が聳えている。そしてその背後から旅籠が一直線に見渡す限り並んでいる。
* ■図3　宮宿：七里の渡し船着き場と宿場：Wikipedia宮宿ギャラリー右端の絵：七里渡船着(宮宿側)「尾張名所図会」前編巻愛智郡
* 広重の絵は、格調高い隅櫓風の建物と屋敷を右に7艘もの帆立船が帆を下ろして停泊している船着き場の場面。熱田神宮の鳥居と常夜灯が立っている。
* ■図4　広重：宮宿の船着き場（Wikipedia宮宿ギャラリー左端。歌川広重東海道53次隷書東海道：宮）
* また、宮塾に入港した御座船の迫力が凄いこと。朱塗りの船体、海に突き出た何十本もの櫂。参勤交代の大名が渡船。先に渡った家来達が宮宿船着き場の石垣の上に座して迎える姿。壮観である。御座船から小舟に乗り換え、岸壁を目指す家来の姿も見える。何人もの船頭が櫂を漕いでいる様子。小舟とは云え、長い舟である。この大名行列の七里の渡しの船賃は一体いくらかかったのであろうか。
* ■図5　芳虎：七里の渡し宮宿に入る御座船と大名一行：入港する大名の御座船。前面の鳥居は熱田神宮の鳥居。中央に常夜灯が描かれている。（東海道名所風景８８）

桑名宿

* 戦国時代、「家康に過ぎたる物が二つあり、唐の頭に本多平八」と謳われ、家康を伊賀越えで救い、あらゆる戦に戦陣を切って切り込み、かすり傷一つ受けなかったという本多平八郎忠勝。徳川の四天王で腹心中の腹心である。家康は関東の重要な拠点、房総の大多喜城構築を本多忠勝に命じる、次いで西の拠点、桑名藩の藩主に任命する。本多は揖斐川沿いに堅固な桑名城を構築。その傍らに七里の渡しの船着き場を整備する。客を満載した帆立船が桑名港に入る。左手、城壁の上に桑名城隅櫓が燦然と輝いている。上陸すると大きな鳥居が立っている。これは伊勢神宮参詣への一の鳥居なのである。ここはお伊勢参りの玄関口なのだ。
* ■図6　広重：七里の渡し、桑名の船着き場

（Wikipedia七里の渡し、桑名側ギャラリー：左から3番目：歌川広重「行書東海道53次桑名　海上七里の渡し口」

* 発展した桑名宿の規模は、本陣２軒、脇本陣4軒、旅籠120軒に及んだ。この旅籠の数は、東海道53宿中、宮宿について第2位の規模となる。

脇往還　佐屋街道（姫街道）

* 船旅を好まない人のために、宮宿から桑名宿まで陸路を行く、脇往還、佐屋街道があった。これは宮宿から岩塚宿、神守宿を経由し、木曽川支流の佐屋川に出る。そこに佐屋宿がある。瀟洒な料理屋などもあり、洒落た宿場である。宮宿からここまで6里の歩き旅。そしてここから舟に乗る。木曽川を下ること3里。桑名宿に到着する。全部で約9里（36ｋｍ）の道程である。佐屋路は、寛永11年（１６３４）将軍家光が上洛の際に尾張初代藩主徳川義直が開いたルートとされる。時間はかかるが、船旅に比べ安全、着実なルートというわけで、婦人、子供が多く、別名、姫街道と呼ばれた。佐屋路経由の経費は、七里の渡しに比べ2.5倍もかかったと云うが優雅で安全な旅が期待できるため、迂回路として盛んに利用されたという。